

中野農園高槻農場の水耕栽培 経営者会議会員らが視察

大阪府農業経営者会議(中筋秀樹会長)は9月3日、地区研究会を開き、経営者会議及び大阪府農業法人協会の会員である「株式会社中野農園(中野剛代表取締役)」の高槻農場を視察。当日は、会員農家や関係機関など21人が参加した。

60年、中野昭二前代表(現会長)が門真市を拠点に水耕栽培を行う「有限会社中野農園」として設立。以来、門真農場でスプラウトの生産に取り組んできたが、需要増加に対応するために、国の事業を活用して令和3年に敷地面積約94坪、ハウス規模約50坪の高槻農場を新設した。この高槻農場では、カイワレ、豆苗、などのスプラウトを生産している。

衛生管理を徹底し外部からの異物混入を排除するために、ハウスの底地を全面コンクリート張りにした農地法第43条第1項の規定による「農作物栽培高度化施設」で、府内では初の事例となる。

この日は、高槻農場の栽培は場をはじめ、梱包、冷蔵庫、出荷場など播種前から出荷までの一連の設備を見学。参加者は、広大な敷地において徹底管理された作業工程の解説を熱心に聴き入った。



中野代表(左)から農場内の設備について説明

農水省 農村研修

都市農業の現場の实情を学ぶ

富田林市・ナカスジファーム 農水省2年目・工藤大知さん

農林水産省入省2年目の工藤大知さん(28)は、8月19日から9月13日にかけて富田林市西板持でナスやキュウリを生産するナカスジファーム(中筋秀樹代表)に滞在し、生産現場について学ぶ農村研修を受けた。

元々企業向けのシステム保守・改修を行うエンジニアだった工藤大知さんは、近年の国際情勢不安から国民の「食」が当たり前に保障されるものではないことを実感。祖父が米農家であつたこともあり、令和5年度に農林水産省に転職した。

滞在中は、キュウリの収穫作業に携わったほか、他の農業経営者との意見交換、更には中筋代表が企画している地域計画策定の話し合いの場にも出席。

「今は、都市農業は国の農業施策の対象にならないことがある。だからこそ都市農業の現場を少しでもよく知って欲しい」と中

筋代表はその意図を説明する。地域の担い手で運営する「富田林市きらめき農業塾」の行事や運営にも参画し、農家と交流。都市部においては、経営規模によらず、創意工夫による集約型農業で収益をあげている経営が多く存在するということを、農園内外での経験を通じて学んだ。

また、消費者向けの直売イベントの運営では、消費者との距離の近さも実感。「新鮮で美味しい野菜を味わってもらえる良さ」と、直に消費者の反応が分かることは都市農業の魅力の一つと感じた」と言う。

反面、土地利用型農業と比べ、労働集約的で、機械導入による



中筋代表(右)から栽培指導を受ける工藤さん(左)

コストダウンが難しいことなど、都市農業ならではの課題も知った工藤さん。研修を経た今後の意気込みについては「都市農業の魅力も大変さも知ったので、いづれ生産現場と都市住民をつ

なぎ、農業に興味を持ってもらい就農につなげるような業務に関わることがあれば、ぜひ今回の経験を活かしたい」と話してくれた。

(沼田)